

友人付き合いにおけるグループ志向の構造

田村 未来*・石井 徹**

The structure of group-oriented behaviors with friends.

Miku TAMURA・Tooru ISHII

要約

本研究では青年期女子の特徴とされるグループ行動の構造を探った。ほぼ300人の調査結果をもとに因子分析を行ったところ、グループ志向、個人志向ともに、互いに独立な複数の因子を確認した。グループ志向の因子の一つは社会規範に関わるものだった。またもう一つは学内での行動に関わるものだった。他方女子大学生は男子大学生よりも、独りぼっちだと他者から見られることを気にしていた。さらに学年が上がるにつれて個人志向の因子が増えた。しかし反面、グループ志向の因子は入学時のまま保たれていた。私たちはやはり、友達付き合いのあれこれを経験から学んでゆくように見える。

キーワード：友人付き合い，集団志向，個人志向，規範，適応

abstract

In this study we investigated the structure of group-oriented behaviors which are recognized as characterized the relationships with friends of adolescence. Factor analyses based on the data of almost three hundred college students revealed both some group-oriented factors and some individual-oriented ones. All of them were independent each other. One of the group-oriented ones referred to social norms about group-oriented behaviors. Another referred to behaviors on campus. Female students were more sensitive to others' evaluation, "she/he looks lonely", than male students. It seemed that individual-oriented factors increased as students grew up, holding as many group-oriented ones as they did when they were new students. We seem to learn how to become friends by experience after all.

keywords: relationships of friends, group-oriented, individual-oriented, social norm, adaptation.

*2013年度島根大学法文学部社会文化学科卒業生，**島根大学法文学部社会文化学科

友人との付き合いは、ドラマや小説などでは、互いに競い合いかつ助け合い、あるいは励まし合うところ強く貴重で、あるいは美しく望ましい誠実さに溢れた経験として描かれることが多い。しかし現実には、互いにけなし合い、だまし合い、あるいは罵り合う不誠実で殺伐とした、時に醜く、煩わしい経験としてニュースなどに登場する。日常生活において我々はこの両方を極端とした様々な付き合い方をしていると思われるものの、その実態はまだ多くが曖昧なままに見える。このような友人付き合いについて少しでも理解を深めるために、本研究ではまず、日々の様々な友人付き合いの中から特に女子中学生や女子高校生によく見られる集団的友人関係のように、一緒に行動する特定の人たちでグループを形成する現象に注目した。

本研究では、一緒に行動する特定の友人たちで形成されたグループに所属したがる傾向をグループ志向と名付けその構造を考える。このグループ志向について従来の研究では、まず男女の友人の付き合い方について違いがあることが指摘されている。またこれまで主に、特に学校生活における女性のグループに焦点を当てて研究されてきた。

例えば佐藤（1995）は、教育心理学的観点から、女子高校生がグループに所属する理由とグループ志向との関連を調査した。そこではまず女子高校生がグループに所属する理由が2つあることが見出された。この2つはどちらも自己防衛的な内容で、1つは浮いた存在になることを避け、自分を守るための安全策としてグループを必要とするという消極的な理由であった。もう1つは何かあった時に複数の人から自分を支えてもらえるとして、グループを肯定的に受け入れる積極的な理由であった。佐藤（1995）はこの2つの前者を消極的な

理由、後者を積極的な理由としてグループに所属する理由の表と裏と位置づけた。しかし直交回転を施した因子分析結果からは、前者は「グループに属していることが当たり前」という規範を意識した理由と考えた方がふさわしいように見える。佐藤（1995）自身が、その考察において久世（1962）を引用してステレオタイプの存在とその影響を示唆していることとも符合する。また重回帰分析の結果は、この消極的な理由と積極的な理由の両方が、グループでいることを重視し、一緒に行動してくれる人を求める固定的集団志向と関連していることを示した。さらに、消極的な（規範的な）理由は、特定の人たちだけと固まっていたいという閉鎖的集団志向とも関連していた。この研究では女子高校生のグループ志向に、単なる仲間意識や好き嫌いの感情は示されず、何かあった時には支えてもらうといった現実的な理由や「女性が一人でいることはおかしい」という社会通念の影響による理由が示された。佐藤（1995）はあからさまには触れてないものの、その背景には、一人でいることの不安や、規範からの逸脱に対する「周囲の目」への懸念をうかがうことができる。

大嶽・多川・吉田（2010）は、女子大学生への面接調査によって、このような内面の状態を分類し図式化した。大嶽ら（2010）は「ひとりぼっち回避行動」に焦点を当て、中学時代から大学生に至るまでの聞き取り結果をもとに、その捉え方の発達的変化を検討した。その結果、青年期前期（中学時代）はグループに所属することで誰かと一緒にいる安心感と、形として群れていることへの漠然とした不安感とが共存する極めて不安定な状態であった。しかし、青年期後期（大学時代）では友人関係が円滑で高ストレス状態に陥らないた

めの程よい距離感を保つことができるようになることが明らかになった。この研究から、年齢が上がるにつれて友人との付き合い方を習得し、グループ志向の捉え方も変化する可能性が考えられる。

落合と佐藤（1996）は青年期における友人との付き合い方について男女差と発達的变化に着目して検討する中で同様の傾向を指摘した。落合と佐藤（1996）では中学生・高校生・大学生が対象になった。中学生では本音を隠して友人と付き合う防衛的な付き合い方、自分を出さず周りに合わせようとする同調的な付き合い方が特徴的であった。高校生では特徴的な友人関係はなかった。大学生では自己開示し、友人と積極的に相互理解しようとする付き合い方が特徴的であった。つまり、学年が上がるにつれて友人と浅く関わる表面的な付き合い方から深く関わる本質的な付き合い方になるといえる。また、この友人関係の変化は女性において特に顕著であった。性別ごとの友人関係の特徴は、男性は友人と自分は異なる存在であるという認識を持って付き合う自立した付き合い方であった。一方、女性は友人と理解し合い、共鳴し合って互いにひとつになるという付き合い方であった。

このように、これまでの多くの研究が指摘する年齢の上昇による発達変化は、一つには、上に記したような内面的な成長、すなわち経験の蓄積による学習の重要性を示した。しかしその一方でもう一つ、適応の観点から環境側の要因を検討する必要性を示唆する。すでに佐藤（1995）が指摘したような「女性が一人であることはおかしい」といった社会通念もグループ志向に影響を与える環境側の要因の一つとして検討の対象にすべきと考える。

このような検討から本研究では、特に「一人で行動することはおかしい」という社会通

念に着目する。近年、「お一人様歓迎レストラン」や「お一人様限定ツアー」、「一人焼肉専門店」など、「お一人様」が小さな流行になった。その結果、女性が一人で行動できる範囲も広がりつつある。このことから、特に女性が一人で行動したいと考えているにも関わらずそれができない風潮、すなわち社会規範の存在がうかがえる。本研究では、一人で行動したいと考える傾向のことを個人志向と考え、ひとまずグループ志向の対極として位置付ける。このような視点でこれまで友人付き合いに焦点を当てた研究はなく、個人志向の要因やその実態についてはまだ曖昧なままである。そこで本研究では、大学生が友人付き合いにおいてどのようなグループ志向、あるいは個人志向を持っているのか、その実態を明らかにすることを目的として調査を行う。

また本研究では、規範の影響を検討する際には多元的無知にも留意すべきと考える。Prentice & Miller（1993）は、キャンパス内の飲酒について調査し、調査に応じた学生のほぼ全員が「私はともかく、周りの人はみんな、お酒を飲むと気分が良くなる」という実態とは異なる思いこみを持っていることを明らかにした。焦点は、みんなが「私はともかく」と思っている点である。この思いこみは「だからお酒の席では私も陽気に振る舞わなければ」という形で、実態の伴わない思いこみをさらに強化する。Miller & McFarland（1987）や Prentice & Miller（1993）、あるいは Miller & Nelson（2002）は、この現象を多元的無知（pluralistic ignorance）と名付け、その形成過程や影響の仕方を明らかにしてきた。本研究においても自己の友人付き合いと他者の友人付き合いのイメージの差を検討することで、友人付き合いに対する多元的無知の存在を検証する。

方 法

予備調査

調査協力者 島根大学の大学生 44 名（男性 19 名，女性 25 名）のデータを用いた。

手続き 調査協力者に調査用紙を配布し，以下の教示を行った。「この調査は，私たちが普段周りの友人たちとどのような関わり方をしているのかについて調べるための調査です。

この調査の結果は統計的に処理され，個人を特定することはありません。自分の思ったとおりに記入してください。質問にはあまり深く考えず，ありのままを答えてください。」教示後，表紙に回生と性別の記入をもとめた。

質問項目の作成 佐藤（1995）のグループに所属する理由から 32 項目を引用した。さらに，事前に行った聞き取り調査を基にグループ志向，個人志向を測る 126 項目を作成した。

調査用紙の構成 合計 158 項目の質問について，それぞれどの程度あてはまるかを「あてはまる」，「どちらともいえない」，「あてはまらない」の 3 段階評定法で回答をもとめた。

質問項目の選定 まず予備調査の質問 158 項目を内容に従って，グループ志向を示す 93 項目，個人志向を示す 53 項目，どちらともいえない 12 項目に分類した。その中から「あてはまる」と「あてはまらない」の回答人数がほぼ同数の 29 項目を選定した。そして，グループ志向と個人志向を測る項目が対応するように 11 項目を選定した。さらに，多元的無知のために予備調査で多くの人が「あてはまる」と回答した 10 項目を加えた。この項目は本調査の問 2 との比較によってその存在をうかがうためのものである。最終的に質問項目はグループ志向を問う 27 項目，個人志向を問う 23 項目となった。

本調査

調査協力者 島根大学の大学生 309 名からデータを得た。回答に不備のあった 10 名を分析から除外し，299 名のデータを用いて分析を行った。そのうち，1 回生は 154 名，上回生（大学 2 回生～大学院 1 回生）は 142 名であった（回生不明 3 名）。また，男性は 146 名，女性は 145 名であった（性別不明 8 名）。

手続き 調査協力者に本研究は友達との付き合い方に関する調査であることを伝え，調査を行った。心理学の初級授業の講義時に調査用紙を配布し，回答を求め，講義終了時に回収した。

調査用紙の構成

表紙に回生，年齢，性別の記入欄を設けた。調査用紙は問 1 から問 3 までの 3 部構成であった。問 1 の質問は 50 項目であり，予備調査から選出したグループ志向を測る 27 項目，個人志向を測る 23 項目をランダムに配置した。友達との付き合い方について，自分自身の考えにどの程度あてはまるかを 6 段階評定法（全くあてはまらない・あてはまらない・どちらかといえばあてはまらない・どちらかといえばあてはまる・あてはまる・非常にあてはまる）で尋ねた。

問 2 の質問は多元的無知の存在をうかがうための問 1 と同じ 10 項目であった。グループ志向を測る項目は 7 項目，個人志向を測る項目は 3 項目であった。周りの人たちが実際にしていると思う友達との付き合い方について，どの程度あてはまるかを，問 1 と同じ要領で 6 段階評定法で尋ねた。

問 3 の質問は 7 項目であり，自分自身の現在の友達付き合いについて，選択，自由記述による回答を求めた。主な質問は，「友人と呼べる人は何人くらいいますか」，「あなたの友人と呼べる人の年齢は主に何歳くらいです

か」,「いつも一緒に行動している友達のグループはありますか」であった。

結果と考察

友人付き合いの概観

調査協力者全体の友人付き合いに対する回答の集計結果を表1に示す。友人と呼べる人の人数は一部の特殊な例を除いて10~20人であった。付き合っている友人の主な年齢の最頻値は18~20歳なので、調査協力者の平均年齢が19.27歳であることを考え合わせると、付き合っている友人は同年代もしくは年上といえる。また、全体の約96%の人は自分の友人と呼べる人の人数は周りの人と比べて少ない方あるいはふつうだと思っていた。さらに、全体の約74%の人がグループに所属し、そのうち約53%の人が1つのグループに所属していた。

性別に見ると、友人と呼べる人の数については、男性は周りの人と比べてふつう、もしくは少ない方だと思っている人が多かった。女性はふつうよりも少ない方だと思っている人の人が多かった。友人の主な年齢については、男性は同年代もしくは年上の友人と付き合っていた。女性は同年代もしくは年下の友

人と付き合っていた。男女共に同年代の友人と付き合っているが、男性は年上、女性は年下の友人とも付き合っているといえる。さらに、所属しているグループの数については、男性では1つよりも複数の方がやや多かった。女性では複数よりも1つの方が多かった。男性は複数のグループ、女性は1つのグループと付き合っているといえる。

回生別に見ると、友人の主な年齢については、1回生は同年代の友人と付き合っていた。上回生は同年代もしくは年上の友人と付き合っていた。1回生、上回生共に同年代の友人と付き合っている一方で、調査時期の1回生と上回生にはまだ交流がないことがわかる。そして回生が上がると年上の友人とも付き合うようになると考えられる。所属しているグループの数については、1回生、上回生共に複数よりも1つの方が多かった。

友人と呼べる人の人数が100人未満と回答した258名のデータを用いて、所属しているグループ(なし・1つあり・複数あり)を独立変数とした1要因分散分析を行った。付き合っているグループごとの友人数を表2に示す。その結果、なしよりも複数ありの友人の数が有意に多かった($F(2,255)=6.45, p<.01$)。

表1. 友人付き合いの概観

	周りの人との比較				主な年齢 の最頻値	調査協力者 の平均年齢	グループの有無		グループの数	
	人数の 最頻値	少ない方	ふつう	多い方			ある	ない	1つ	複数
全体	10	148 (50%)	135 (46%)	12 (4%)	20	19.27	218 (74%)	77 (26%)	116 (53%)	102 (47%)
男性	10	68 (47%)	72 (50%)	4 (3%)	20	19.32	100 (69%)	44 (31%)	48 (48%)	52 (52%)
女性	20	77 (54%)	58 (41%)	8 (5%)	18	19.23	111 (78%)	32 (22%)	65 (59%)	46 (41%)
1回生	20	75 (49%)	72 (47%)	5 (3%)	18	18.44	112 (74%)	39 (26%)	59 (53%)	53 (47%)
上回生	10	71 (51%)	62 (44%)	7 (5%)	20	20.17	103 (73%)	38 (27%)	56 (54%)	47 (46%)

表 2. グループの数と友人数

	なし	1つあり	複数あり
平均値	17.97	23.11	27.82
S.D.	14.19	16.74	18.53
n	68	108	82

このことから、所属しているグループの数が
増えるにつれて、友人の数もそのまま増える
といえる。

グループ志向尺度の因子分析結果

有効回答者 299 名のグループ志向尺度 50 項
目のデータを用いて主因子法 varimax 回転による
因子分析を行った。因子負荷量が絶対値 0.5
に満たない項目を分析から除外しつつ最終的
に固有値 1.0 以上の 4 因子 15 項目を抽出した。
グループ志向尺度の項目および因子分析にお
ける因子負荷量を表 3 に示す。分析に際して
は 6 段階評定法の「全くあてはまらない」を
1 とし、間の項目を 2 から 5、「非常にあては

まる」を 6 と得点化した。

第 1 因子に負荷量の高かった項目は「焼肉
屋には友達と一緒にに行く」、「遊園地には友達
と一緒に行く」などの 7 項目であり、社会的
に友達と一緒に行くものとされている場所に
関する内容であった。そこで「社会通念因子」
と命名した。

第 2 因子に負荷量の高かった項目は「学校
では友達と一緒にご飯を食べる」、「授業は友
達と一緒に受ける」などの 4 項目であり、学
校での行動に関する内容であった。そこで「学
校因子」と命名した。この因子が抽出された
ことから、学校では学校以外の場とは別の、
友達との仲間意識が働いていると考えられる。

第 3 因子に負荷量の高かった項目は「一人
でラーメン屋に行く」、「一人で牛丼屋に行く」
の 2 項目であったため、「ラーメン牛丼因子」
と命名した。この因子を抽出したことから、
大学生全般にとってラーメン屋、牛丼屋は焼

表 3. グループ志向尺度の因子分析結果

項目内容	社会通念 因子	学校因子	ラーメン 牛丼因子	サークル 因子
焼肉屋には友達と一緒にに行く	.78	.11	.10	.04
居酒屋には友達と一緒にに行く	.74	.07	-.03	.01
回転寿司には友達と一緒にに行く	.74	.18	-.07	.05
遊園地には友達と一緒にに行く	.71	.16	.01	.00
ファミレスには友達と一緒にに行く	.69	.20	-.14	.08
海には友達と一緒にに行く	.67	.25	-.10	-.02
ラーメン屋には友達と一緒にに行く	.62	.28	-.31	.16
学校では友達と一緒にご飯を食べる	.25	.89	-.12	.05
学校では一人でご飯を食べる	-.13	-.80	.25	-.08
学食には友達と一緒にに行く	.32	.71	-.17	.12
授業は友達と一緒に受ける	.23	.65	-.05	.20
一人でラーメン屋に行く	-.05	-.18	.88	-.15
一人で牛丼屋に行く	-.09	-.19	.77	-.11
サークルや部活動に入る時、友達と一緒に入る	.10	.17	-.10	.88
サークルや部活動に入る時、一人で入る	.00	-.11	.16	-.83
初期の固有値	5.81	2.41	1.45	1.29
寄与率(%)	25.15	18.15	11.00	10.56
累積寄与率(%)	25.15	43.30	54.30	64.86

主因子分析・Varimax 回転

肉屋等とは異なる，比較的一人でも入りやすい別格の飲食店であると考えられる。

第4因子に負荷量の高かった項目は「サークルや部活動に入る時，友達と一緒にいる」，「サークルや部活動に入る時，一人でいる」（逆転項目）の2項目であり，サークルや部活動に所属することに関する内容であった。そこで「サークル因子」と命名した。サークルや部活動に入ることは，新しい環境に入ることを意味しており，それは期待とともに不安を伴う行動である。佐藤（1995）では，女子高校生が学校生活においてグループに所属する理由の一つとして，「ひとりでいるのは何だか心細いから」，「自分ひとりで行動するには自信がないから」などの“消極的な理由”を挙げている。このことから，サークルや部活動に入る時，友達と一緒にいることによって新しい環境に入ることへの不安を和らげるといふ期待がうかがえる。

第1因子から第4因子までは後述するように性別，回生ごとの因子分析結果にも見られたため，本研究におけるグループ志向の構造の基礎と考える。また，全体の結果において「社会通念因子」，「学校因子」，「サークル因子」を抽出したことから，大学生において少なくとも3種類の，特徴の異なるグループ志向が働いていることが明らかになった。また，「ラーメン牛丼因子」を抽出したことから個人志向も1種類，上記3つの集団志向とは独立に働いていることが明らかになった。

a. 性別による構造の異同

有効回答者299名のデータから性別不明の8名を分析から除外し，男性146名・女性145名のデータを用いて全体のデータの分析と同様の手順で主因子法 quartimax 回転による因子分析を行なった。男性では最終的に固有値1.0以上の6因子20項目を抽出し，女性では固有

値1.0以上の6因子19項目を抽出した。

性別に構造を見ると，男女共に第1因子から第4因子までは全体の因子分析結果とほぼ同様の結果となった。ただ，男性の第3因子はサークル因子であり，第4因子に負荷量の高かった項目は「一人でカフェに行く」，「一人でラーメン屋に行く」の2項目であったため，「ラーメンカフェ因子」と命名した。さらに，男性の第5因子に負荷量の高かった項目は「人と同じことがしたい」，「人と同じことをしたくない」（逆転項目）の2項目であり，周りの人と同じ行動を取りたいという内容であった。そこで「同調因子」と命名した。また第6因子に負荷量の高かった項目は「ひとりぼっちな人だと思われたくない」，「一人で行動していると，周りの人から友達がいないと思われそう」の2項目であり，周囲の人からの評価を気にしている内容の項目であった。そこで「周囲からの評価因子」と命名した。

一方，女性の第5因子に負荷量の高かった項目は「カラオケには友達と一緒にに行く」，「一人でカラオケに行く」（逆転項目）の2項目であり，カラオケに行くことに関する内容であった。そこで「カラオケ因子」と命名した。第6因子は男性の第5因子と同様の「同調因子」であった。

性別による因子分析結果から，男女共に少なくとも5種類のグループ志向，1種類の個人志向が働いていた。しかし「周囲からの評価因子」は，男性では抽出したものの女性については見いだせなかった。周囲からの評価に関して男性は気にする人からしない人まで広く存在することがわかる。他方の女性の分布は，後にこの因子に関する分散分析結果から明らかにする。

b. 回生別による構造の異同

有効回答者299名のデータから回生不明の

3名を分析から除外し、1回生154名・上回生の142名のデータを用いて全体のデータの分析と同様の手順で主因子法 varimax 回転による因子分析を行なった。1回生では最終的に固有値1.0以上の6因子23項目を抽出し、上回生では固有値1.0以上の6因子21項目を抽出した。グループ志向尺度の項目および上回生の因子分析における因子負荷量を表4に示す。

1回生の分析では第1因子から第4因子までは全体の因子分析結果とほぼ同様の構造となった。ただし、第1因子の「社会通念因子」の項目数が多く、全体の「社会通念因子」の項目に「旅行には友達と一緒にに行く」、「牛丼屋

には友達と一緒にに行く」、「映画館には友達と一緒にに行く」、「カフェには友達と一緒に行く」の4項目が加わった11項目となった。また、第5因子は「同調因子」であった。第6因子に負荷量が高かった項目は「一人で映画館に行く」、「一人でコンサートを観に行く」の2項目であり、映画館やコンサートに行くことに関する内容であった。そこで「映画コンサート因子」と命名した。

上回生では第1因子から第3因子までは全体の因子分析結果とほぼ同様の結果となった。しかし、第4因子は「カラオケ因子」とは逆の方向を示す「一人カラオケ因子」となり、

表4. グループ志向尺度の因子分析結果（上回生）

項目内容	社会通念 因子	学校因子	ラーメン 牛丼因子	一人カラ オケ因子	逆サークル 因子	旅行因子
ファミレスには友達と一緒にに行く	.74	.08	-.12	-.10	-.07	-.05
回転寿司には友達と一緒にに行く	.72	.16	.01	-.13	-.02	.01
カフェには友達と一緒にに行く	.69	.09	-.15	-.12	-.10	.16
居酒屋には友達と一緒にに行く	.67	-.01	-.05	-.02	-.03	.14
焼肉屋には友達と一緒にに行く	.64	.05	.05	-.13	.00	.06
ラーメン屋には友達と一緒にに行く	.63	.15	-.39	.05	-.10	-.02
海には友達と一緒にに行く	.62	.19	-.04	-.03	.07	.28
映画館には友達と一緒にに行く	.53	.35	-.20	-.33	-.04	.31
学校では一人でご飯を食べる	-.18	-.81	.20	.20	.06	-.05
学校では友達と一緒にご飯を食べる	.33	.81	-.13	-.07	.01	.03
授業は友達と一緒に受ける	.19	.72	.06	.06	-.23	.15
授業を一人で受ける	.19	-.63	.02	.06	.22	-.04
学食には友達と一緒にに行く	.36	.56	-.23	-.13	-.09	.21
一人でラーメン屋に行く	-.14	-.07	.88	.12	.10	-.06
一人で牛丼屋に行く	-.12	-.15	.79	.13	.15	-.17
一人でカラオケに行く	-.10	-.03	.15	.81	.09	-.05
カラオケには友達と一緒にに行く	.33	.17	-.06	-.68	-.07	.18
サークルや部活動に入る時、一人で入る	-.02	-.16	.14	.05	.86	-.08
サークルや部活動に入る時、友達と一緒に入る	.11	.25	-.14	-.13	-.76	.09
旅行には友達と一緒にに行く	.47	.16	-.05	-.09	-.06	.80
一人で旅行に行く	-.05	-.15	.31	.22	.21	-.55
初期の固有値	7.46	2.80	1.87	1.38	1.29	1.09
寄与率(%)	19.07	14.19	9.29	7.55	7.16	6.05
累積寄与率(%)	19.07	33.26	42.55	50.10	57.26	63.31

主因子分析・Varimax 回転

第5因子に負荷量の高かった項目は「サークルや部活動に入る時、一人で入る」「サークルや部活動に入る時、友達と一緒に入る」(逆転項目)であり、第3因子と同様に、全体の結果の第4因子とは逆の方向を表した。そこで「逆サークル因子」と命名した。上回生において「逆サークル因子」が見られたことから、全体の因子構造には1回生の「サークル因子」が強く反映されていたと考えられる。また、上回生の第6因子に負荷量の高かった項目は「旅行には友達と一緒に行く」「旅行には一人で行く」(逆転項目)の2項目であり、旅行に行くことに関する内容であった。そこで「旅行因子」と命名した。

1回生の因子分析結果からは4種類のグループ志向、2種類の個人志向が働いていることが明らかになった。その一方で上回生の因子分析結果からは、3種類のグループ志向、3種類の個人志向が働いていることが明らかになった。上回生の構造は、1回生や全体の構造に比べて一人因子の重要性が増していることが見て取れる。すなわち、学年が上がるにつれて個人志向が多様化し、グループから離れて一人で行動する場面が多くなるといえる。大嶽ら(2010)においても、青年期前期(中学時代)から青年期後期(大学時代)に移行するにつれ、日々の葛藤の中で次第に「つきあひ方の習得」が可能になることが示されている。また「ひとりぼっち回避行動」をとることの捉え方が変化し、強くこだわった友人関係からほどよくゆるやかな友人関係に変化していくことも示唆された。本研究においても学年の上昇に伴う同様の発達の变化が見られたといえる。

またこれらの分析を通じて、複数のグループ志向と個人志向の存在が示された。少なくとも日常生活において、両者は一つの考え方

の対極を成すものではなく、互いに独立な別の友人付き合いと考えられる。つまりグループ志向も個人志向もともに高い人物、そしてともに低い人物が存在する。

友人付き合いの分布

友人付き合いの構造に対する検討に続いて、その中における回生と性別による分布の様子を検討した。全体の因子分析によって抽出した4つの因子に関して回生と性別による2要因分散分析を行った。分析には性別不明の8名、回生不明の3名を除いた有効回答者288名のデータを用いた。また分析に際しては、全体のデータを用いた因子分析結果から得た「社会通念因子」の7項目、「学校因子」の4項目、「ラーメン牛丼因子」の2項目、「サークル因子」の2項目の得点をそれぞれ足して項目数で割った値を算出し、各因子の得点とした。

a. 社会通念因子得点

社会通念因子得点の群ごとの平均値・標準偏差・度数を表5に示す。分散分析の結果、回生の主効果が認められ($F(1,285)=6.53$, $p<.02$), 上回生の平均値が有意に高かった。また、性別の主効果もあり($F(1,285)=7.02$, $p<.01$), 女性の平均値が有意に高かった。すなわち、1回生よりも上回生の方が、男性よりも女性の方が焼肉屋等には友達と一緒に行くものだという社会通念を強く持っていた。1回生はまだ社会通念を十分に知らないと考えられる。また、女性は男性に比べて社会通念を

表5. 社会通念因子得点

		男性	女性
1回生	平均値	4.46	4.62
	S.D.	1.02	.82
	<i>n</i>	72	78
上回生	平均値	4.61	4.99
	S.D.	.83	.78
	<i>n</i>	72	67

より強く持っていると考えられる。回生と性別の交互作用は有意ではなかった。

b. 学校因子得点

学校因子得点の群ごとの平均値・標準偏差・度数を表6に示す。まず回生の主効果があり ($F(1,284)=4.94, p<.03$), 1回生の平均値が有意に高かった。また、性別の主効果もあり ($F(1,284)=8.79, p<.01$), 女性の平均値が有意に高かった。上回生よりも1回生の方が、男性よりも女性の方が学校では友達と一緒に行動すると思っていた。1回生は上回生に比べて学校生活への慣れが少なく、新しい環境への不安も大きいため、友人と行動を共にしたいと考える可能性が指摘できる。また、女性に関しては、佐藤(1995)で女子高校生が学校生活において一人であることを避けようとする気持ちをより強く持っていることを示しており、本研究の結果と一致する。回生と性別の交互作用は有意ではなかった。

c. ラーメン牛丼因子得点

ラーメン牛丼因子得点の群ごとの平均値・標準偏差・度数を表7に示す。まず回生の主効果に傾向があり ($F(1,286)=3.14, p<.08$), 上回生の平均値が有意に高い傾向があった。また、性別の主効果もあり ($F(1,286)=71.44, p<.001$), 男性の平均値が有意に高かった。1回生は上回生ほどラーメン屋と牛丼屋に一人で行くとは思っていなかった。また、女性は男性ほどラーメン屋と牛丼屋には一人で行く

とは思っていなかった。上回生、男性はラーメン屋と牛丼屋において個人志向がより強いといえる。交互作用は有意ではなかった。

社会通念因子得点の結果と考え合わせると、上回生は1回生に比べて、友人と行くべきとされている場所へは友人と、一人で行くべきとされているところへは一人でやっていることがうかがえる。さらにこの傾向は女性よりも男性に顕著だった。女性の「お一人様」には、1回生と同じく、社会通念ではない他の要因の影響がうかがえる。

d. サークル因子得点

「サークル因子」については回生の主効果、性別の主効果、交互作用のどれも見られなかった。学年、性別を問わず新しい環境に入ることへの不安が強い人と弱い人が存在すると言いうる。

e. 同調因子・周囲からの評価因子

上記4因子の分析に加えて、「同調因子」、「周囲からの評価因子」についても、それぞれの2項目の得点を足して項目数で割った値を従属変数、回生と性別を独立変数とした2要因分散分析を行なった。各因子の群ごとの平均値・標準偏差・度数を表8と表9に示す。

「同調因子」では回生の主効果があり ($F(1,286)=4.05, p<.05$), 1回生の平均値が上回生よりも有意に高かった。上回生よりも1回生の方が周囲から浮いた存在になりたくないと考えていた。しかし性別の主効果はなかつ

表6. 学校因子得点

		男性	女性
1回生	平均値	3.89	4.08
	S.D.	.63	.48
	n	72	78
上回生	平均値	3.73	3.94
	S.D.	.65	.52
	n	72	66

表7. ラーメン牛丼因子得点

		男性	女性
1回生	平均値	3.42	2.29
	S.D.	1.24	.97
	n	72	78
上回生	平均値	3.74	2.48
	S.D.	1.38	1.21
	n	73	67

表 8. 同調因子得点

		男性	女性
	平均値	3.36	3.41
1 回生	S.D.	.52	.43
	<i>n</i>	72	78
	平均値	3.29	3.24
上回生	S.D.	.65	.45
	<i>n</i>	73	67

表 9. 周囲からの評価因子得点

		男性	女性
	平均値	3.44	3.69
1 回生	S.D.	1.38	1.00
	<i>n</i>	72	78
	平均値	3.14	3.53
上回生	S.D.	1.25	1.11
	<i>n</i>	73	67

た。周りの人と同じ行動を取ることで周囲から浮いた存在になりたくないと考えていることについて男女に違いは認められなかった。また、交互作用も認められなかった。

一方、「周囲からの評価因子」では回生の主効果はなかったが、性別の主効果があった ($F(1,286)=5.06, p<.03$)。女性の平均値が有意に高く、男性よりも女性の方が周りの人から一人ぼっちな人だと思われたくないと考えていた。また、交互作用は認められなかった。

これまでの結果から、特に学校において、1回生は上回生に比べてグループ志向が強く働くといえる。学校においては1回生が上回生よりも友達と一緒に行動すると思っていたという結果の背景には、前者は後者に比べて新しい学校生活や友人付き合いに不安をより多く感じていることがうかがえる。学年が上がるにつれて、学校生活への慣れや友人との付き合い方を習得することによって個人志向へと移行していくと考えられる。他方、規範の受け入れについても時間が必要であり、焼肉屋、遊園地等の社会的に友達と一緒にいくとされている場所については1回生よりも上回生のグループ志向が強く、ラーメン屋等の社会的に一人でいくとされている場所については同じく1回生よりも上回生の個人志向が強く働いた。

また、性別に関しては、女性は男性に比べ

てグループ志向が強く働いたと言っている。「周囲からの評価因子」の結果が示すように、女性は男性に比べて自分に対する周りの人からの評価を気にしている。グループ志向の規範には従い、個人志向の規範には従わない背景と考えられる。佐藤(1995)では、女子高校生が学校生活において一人であることを拒絶する理由として、“女性が一人でいることはおかしい”という風潮(社会通念)や、グループに入らず一人でいることは周りから友達付き合いができない人、魅力のない人、変わった人だと見られると考えていることを指摘した。本研究の結果はこの指摘を支持している。

友人との付き合い方に関する他者認知の分析

周りの人たちが実際にしていると思う友人との付き合い方を尋ねた問2の結果についても上記と同様の分析を行った。問2の10項目のうち、全体の因子分析結果から得られた「社会通念因子」と共通の6項目の得点を足して項目数で割った値を算出し、「社会通念因子」の他者認知得点とした。また「トイレ行く時は一人で行く」、「花火大会には友達と一緒にいく」、「図書館に行く時は一人で行く」、「友達に関係なく、自分の趣味を持つ」の諸項目についてはそのままの評定値を用いた。その結果、1回生よりも上回生の方が周りの人たちは焼肉屋、遊園地等には友達と一緒にいくと思っており、トイレと図書館には一人で行く

と思っていた。また、男性よりも女性の方が周りの人たちは花火大会には友達と一緒にいくと思っていた。つまり、上回生は1回生に比べて、周りの人たちは焼肉屋、遊園地等においてグループ志向が強く働き、トイレや図書館において個人志向が強く働くと思っていた。友人付き合いについて、全般的には、本研究において多元的無知の存在は確認できなかった。

グループ志向尺度のグループによる分析結果

無回答の4名を除いた有効回答者295名のデータを用いて、全体の因子分析結果から得た4つの因子得点を従属変数、所属しているグループ数（なし・1つあり・複数あり）を独立変数とした1要因の分散分析を行なった。

a. 社会通念因子得点

所属グループ数の主効果が有意であったため ($F(2,291)=6.13, p<.01$)、Tukeyによる多重比較を行なった（表10）。その結果、なしと1つありの平均値に有意な差があり ($p<.01$)、なしと複数ありの平均値にも有意な差があった ($p<.01$)。グループに所属していない人よりも所属している人の方が焼肉屋等には友達と一緒にいくと思っていた。

b. 学校因子得点

所属グループ数の主効果が有意であったため ($F(2,289)=43.00, p<.001$)、Tukeyによる多重比較を行なった（表11）。その結果、なしと1つありの平均値に有意な差があり ($p<.001$)、なしと複数ありの平均値にも有意な差があった ($p<.001$)。グループに所属し

ている人は所属していない人に比べて、学校では友達と一緒に行動すると思っていた。

c. ラーメン牛丼因子得点

所属グループ数の主効果が有意であったため ($F(2,292)=4.79, p<.01$)、Tukeyによる多重比較を行なった（表12）。その結果、なしと1つありの平均値に有意な差があり ($p<.01$)、なしと複数ありの平均値には有意な傾向があった ($p<.08$)。つまり、グループに所属している人はその数に関わらず、所属していない人ほどラーメン屋と牛丼屋には一人で行くとは思っていなかった。これらの結果から、友人付き合いについて、行動とイメージに食い違いはなかった。

多元的無知を測る項目のグループによる分析結果

多元的無知を測るためにもうけた問2の10項目のうち、全体の因子分析結果から得られた「社会通念因子」と共通の6項目の得点を足して項目数で割った値を算出し、さらに社会通念因子の得点を引いた値を「共通項目」の得点とした。さらに多元的無知を測る10項目のうち、「トイレ行く時は一人で行く」、「花火大会には友達と一緒にいく」、「図書館に行く時は一人で行く」、「友達に関係なく、自分の趣味を持つ」の得点からグループ志向尺度の同じ項目の得点を引いた値を用いて、所属

表 10. 社会通念因子得点

	なし	1つあり	複数あり
平均値	4.36	4.75	4.76
S.D.	1.01	.81	.79
<i>n</i>	77	115	102

表 11. 学校因子得点

	なし	1つあり	複数あり
平均値	3.44	4.11	4.02
S.D.	.63	.46	.46
<i>n</i>	76	115	101

表 12. ラーメン牛丼因子得点

	なし	1つあり	複数あり
平均値	3.37	2.78	2.93
S.D.	1.41	1.33	1.24
<i>n</i>	77	116	102

するグループの数を独立変数とした1要因の分散分析を行った。その結果、「トイレに行く時は一人で行く」、「友達に関係なく、自分の趣味を持つ」には有意な差はなかった。

a.「共通項目」の得点差 所属グループ数の主効果が有意であったため ($F(2,290)=3.80$, $p<.03$), Tukeyによる多重比較を行った(表13)。その結果、なしと複数ありの平均値に有意な差があった ($p<.02$)。複数のグループに所属している人よりも所属していない人の方が、自分とはともかく周りの人は焼肉屋等には友達と一緒にいると思っている、という多元的無知を有している可能性を確認した。

b.「花火大会には友達と一緒にいる」の得点差 所属グループ数の主効果が有意であったため ($F(2,292)=5.42$, $p<.01$), Tukeyによる多重比較を行った(表14)。その結果、なしと複数ありの平均値に有意な差があり ($p<.01$), 1つありと複数ありの平均値にも有意な差があった ($p<.03$)。複数のグループと付き合っている人だけが現実により近い考えを持っていたといえる。

c.「図書館に行く時は一人で行く」の得点差 所属グループ数の主効果が有意であったため ($F(2,292)=4.37$, $p<.02$), Tukeyによる多重比較を行った(表15)。その結果、なしと複

数ありの平均値に有意な差があった ($p<.02$)。グループに所属していない人は複数のグループに所属している人に比べて、自分とはともかく周りの人は図書館には一人では行かないと思っている、という多元的無知があることがわかる。

これらの結果から、実際に友人付き合いをより多く経験することによって自分の友人付き合いと周りの人に対して持っている友人付き合いのイメージの違いがなくなる可能性が想定される。経験の積み重ねが多元的無知を減らし、他者認知のイメージが現実の付き合い方にそって描かれると言いうる。

総合考察

まずグループ志向の構造について、大学生には構造の核となる社会通念(規範)、学校、サークル、ラーメン牛丼の4つの側面があることが明らかになった。さらに上回生では全体の結果に加え、個人志向の構造としてカラオケ、サークルという2つの側面が見出された。特にサークルに関しては1回生ではグループ志向の一要素として抽出したため、1回生と上回生では逆の方向を示す結果となった。友人付き合いの構造から見る時、学年が上がるにつれてグループ志向の中から個人志向が強くなり、群れる友人付き合いから自立した友人付き合いへと変化することを示している。落合・佐藤(1996)でも、年齢が増すにつれて友人と「浅く広く関わる付き合い方」から「深く狭く関わる付き合い方」へと変化すると

表 13. 「共通項目」の得点

	なし	1つあり	複数あり
平均値	.41	.19	.10
S.D.	.88	.68	.75
<i>n</i>	77	114	102

表 14. 花火大会には友達と一緒にいる

	なし	1つあり	複数あり
平均値	.75	.63	.16
S.D.	1.55	1.25	1.21
<i>n</i>	77	116	102

表 15. 図書館に行く時は一人で行く

	なし	1つあり	複数あり
平均値	-.86	-.47	-.28
S.D.	1.54	1.22	1.17
<i>n</i>	77	116	102

指摘していた。これは年齢を重ねるに伴い、友人関係が単なる行動を共にする仲間から本質的な繋がりを持つ相手へと変化することを意味している。またグループ志向と個人志向が互いに相反する一つの志向ではなく、互いに独立な別の志向である可能性も見えた。

同様の傾向はそれぞれの構造の中の分布からもうかがえた。因子得点ごとの分散分析結果から、女性は男性に比べてグループ志向が強く働くことが明らかになった。また、1回生は上回生に比べてグループ志向が強く働くことも明らかになった。視点を逆にすると、男性は女性よりも、上回生は1回生よりも個人志向が強く働くといえる。これは佐藤(1995)、大嶽・多川・吉田(2010)など、従来の研究の知見を支持する結果といえる。また、他者の友人付き合いのイメージに関しても、女性は男性に比べてグループ志向が強く働き、上回生は1回生に比べて個人志向が強く働くことが明らかになった。

しかし、焼肉屋、遊園地等の社会的に友達と一緒にいくとされている場所については、自己の友人付き合い、他者の友人付き合いのイメージ共に1回生よりも上回生のグループ志向が強く働いた。一つには、先に述べたグループ志向と個人志向が独立な関係であることを再びうかがうことができる。もう一つには規範の多重性の存在と、成長あるいは適応の過程に従ったその使い分けの精緻化を見ることができる。特に後者に関しては、実際の行動の調査も含めてさらなる検討が望まれる。

さらにグループによる分析結果から、グループに所属している人はグループ志向が、所属していない人は個人志向が強く働いており、実際もそれに伴った友人付き合いをしていることが明らかになった。また、グループに所属していない人よりも所属している人の方が

自己の友人付き合いと他者の友人付き合いのイメージの間に差が少なかった。友人付き合いにおける経験の効果と重要性を示す一例と云う。同様の知見は、青年期の友人関係を友人との「活動的側面」と友人に対する「感情的側面」の2側面から捉え、その関連を発達の変化から検討した榎本(1999)においても示された。

本研究ではグループ志向の全体的な構造の中から、大学生全般の「ラーメン牛丼因子」、男性の「ラーメンカフェ因子」、1回生の「映画コンサート因子」、上回生の「一人カラオケ因子」、「逆サークル因子」の少なくとも5種類の個人志向の存在を見いだした。新しい環境における不安から漠然としたグループ志向にたよる中、次第に焦点を定めたグループ志向と個人志向が現れる具体的な様態の解明と描写が次の課題となる。また規範の多重性とそれぞれに対する同調と逸脱の優先順位の変化過程は、動機との関連とともに、友人付き合い以外の場面や現象でも今後解明されるべきテーマとなろう。

本研究で体系的かつ実証的に明らかにしたのは、青年期の友人付き合いの、本学における現在の姿である。同様のテーマについて今後さらに探求する際、確かな基点の一つになると考え、公にするものである。

引用文献

- 榎本淳子(1999) 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化
教育心理学研究 47, 180-190.
- Miller, D. T. & McFarland, C. (1987) Pluralistic ignorance: When similarity is interpreted as dissimilarity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 2, 298-305.
- Miller, D. T. & Nelson, L.D. (2002) Seeing ap-

- proach motivation in the avoidance behavior of others: Implications for an understanding of pluralistic ignorance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 5, 1066-1075.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996) 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化
教育心理学研究 **44**, 1, 55-65.
- 大嶽さと子・多川則子・吉田俊和 (2010) 青年期女子における「ひとりぼっち回避行動」に対する捉え方の発達的变化：面接調査に基づく探索的なモデル作成の試み
対人社会心理学研究 **10**, 179-185.
- Prentice, D. A. & Miller, D.T. (1993) Pluralistic ignorance and alcohol use on campus: Some consequences of misperceiving the social norm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 2, 243-256.
- 佐藤有耕 (1995) 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析
神戸大学発達科学部研究紀要 **3**, 1, 11-20.